

向う時、嫡夫人と嫡男は伊犁に残したが、出発の直前、現夫人の蘇美琳女士が乳呑子であった広樹誠氏をかかえて飛行機に飛び乗ったという。蘇夫人も同じく錫伯族で姓はグワルギヤ氏である。那琦氏は夫人は美人の家系であるとい

われたが、夫人がアルタイ学会で発表された満洲語の論文でも、同治年間にムスリムが伊犁を占據した際、彼女の家系の淑花なる美女が、一族を救うためにムスリムの王妃となつたという。

夫人は広祿先生の靈を弔うために台北郊外に立派な墓を造られたが、神田さんもそこに墓参をした。その返礼と思われるが、広樹誠氏が宿舎に来られ、そして神田さんに清朝の敬礼法により、床に跪いて額を床にうちつける叩頭の礼をした。三跪九叩頭の礼などは文献に出ており知つてはいるものの、実際に目にするとは、どう対応してよいか判らず、神田さんもたゞ茫然としておられたのを思い出す。

(日本大学名誉教授)

私は一九九三年八月から二〇〇一年四月まで東京都狛江

「近頃は成城学園前駅も不便になつてねえ……」

一九九九年初夏に小田急線に乗つているときの神田先生と私の会話である。

一九九九年に日本大学大学院博士前期課程に進学した私は、松村潤・加藤直人両先生の推薦のもと、満洲語歴わずか一ヶ月で東洋文庫清代史研究会に参加することとなつたが、神田先生にお会いしたのはその時が始めてであった。高名な神田先生と由緒ある清代史研究会への参加初日は緊張している間に二時間があつという間に過ぎ去つた。神田先生とは帰り道も同じであった。ちょうど山手線の池袋駅に電車が止まつたとき、私が「神田先生のお住まいはどちらですか?」とお聞きしたのを今でも覚えている。

おなじ小田急線沿線に住んで

綿貫 哲郎

市に住んでおり、神田先生のご自宅のある東京都世田谷区成城とは私鉄で二駅しか離れておらず、いわばご近所であった。しかも、院生時代に自転車通学をしていた私の通学路こそ神田先生のご自宅前であったという思いもかけない御縁もあつたことを後日知つた。

一九九七年から始まつた小田急線の複々線化及び地下推進化事業の影響で、急行停車駅であった成城学園前駅は四番線まであるプラットホームが、当時は半分しか使えない不便な時期にあつた。冒頭はそれを嘆がれた時の先生の台詞である。「あと五年間は成城の駅も不便なままでですね。でも完成後に恩恵に与れるかどうか」と神田先生は続けられた。当時私はその台詞を気にも止めなかつた。

神田先生は気さくな先生でもあつた。別な日に私と小田急線に乗つっていたときのことである。目の前に座つていた二十歳そこそこの大学生らしき若者が、座席を神田先生に譲られようとした際、「私は若いですから結構です」とにこやかに対応されていたが、むげに若者の親切を断ることも出来ず、譲られるままに座つたのち、「みんな寄つてた

かつて私を年寄り扱いするんですよ」と答えられ、私自身どういうリアクションをとつてよいか戸惑つてしまつたこともあつた。

二〇〇三年一月に中国社会科学院近代史研究所への研究留学を終えた私は、世田谷区祖師谷に新居を構えたが、その際に神田先生が口にされたブラックユーモアは周囲におられた他の先生をも席捲したが、さる事情でここに記すことが出来ないのが残念である。その一部始終はいまだに懇親会などで話題に取り上げさせて頂いている。

明治大学大学院の小松原ゆりさんが留学されるとき、一時帰国中であつた私に神田先生は「小松原さんという明大の院生が留学するのでお願いしますね」と、定年退職されたあとも後進を思ひやる気遣いを忘れてはおられなかつた。半年後に帰国した後も神田先生は小松原さんのことを気にされて話題にあがつたので、私が「中央民族大学やその他の大學生中の院生など一〇数名を集めて食事会をして紹介しました」と言うと、先生はホッとされた様子であった。こういう先生のお人柄が我々を魅了して止まないので

あろう。

神田信夫先生と東洋文庫

斯波義信

神田先生が亡くなられて半年ほど経った頃から、偶然にも私は成城学園前駅を利用する機会が多くなった。そのたびに神田先生の「成城の駅は不便でねえ……」という言葉を思い出していたが、ついに今年（二〇〇四）九月二六日には成城学園前駅の複々線化及び地下推進化事業もすべて完了し、二本のプラットホームと四本の線路はフル稼働を再開した。また成城学園前駅を含む一部区間では急行と各駅の並行輸送が実施され、さらには駅前の東西口はバリアフリーで貫通されて通行が便利になったことを、神田先生に報告したいと駅を利用するたびに思う。

今はただ、神田先生のご冥福をお祈りする次第である。

（日本大学人文科学研究所研究員、日本大学非常勤講師）

《神田信夫先生と東洋文庫とのご関係を》、というご指示をいただいているので、この方向から先生のご業績やお人柄を偲ぶことにしたい。いうまでもないが、先生は東洋文庫では兼任研究員としてまた清代史研究室の代表として四年、評議員として一八年、理事として五年、東洋学連絡委員として一年弱、事業の運営にご尽力をいただいた。これと並んで、先生が畢生の精魂を傾けられた、学者として、またチーム・リーダーとしての研究上のお仕事は、なんといっても「満文老檔」を中心とした清朝初期史料の蒐集、校訂、訳註、これにもとづく清朝史の復元にあつたと挙げることができる。その作業の場は、ご自宅の書斎、長く勤務された明治大学の研究室・図書館以外では、東洋文庫の清代史研究室そのものであつたということになる。

そこですこし回り道にはなるが、まず「満文老檔」発見の由来、その東洋文庫への渡来という前史、そして神田先生のこの文献へのかかわりという順で述べるのが適当だと思う。

一九〇五年、外務省嘱託であった内藤湖南先生が清初の国都瀋陽（奉天）を訪れて、故宮崇謨閣の蔵書のうちに清朝草創期の太祖、太宗二代の「実錄」の原史料であり、「実錄」以上の価値すらあると目される「原檔・旧檔冊」二〇〇余冊（有圈点、無圈点本とも全て満洲字）が、ほかの貴重な古文書とともに藏されていることをはじめて発見して、この古文書に「満文老檔」の題を冠したことはあまりにも有名な話である。内藤先生はその三年前から独力で蒙古語、満洲語を習得していて、とりあえず各冊の詳しいメモを書き留めて帰国した。まもなく一九〇七年に内藤先生は京都帝国大学助教授に就任され、一九一二年、羽田亨助教授を伴つて故宮を再訪し、有圈点本「満文老檔」および「五体清文鑑」の全文を写真乾板（各四三〇〇および五

さて、京都帝大文学部図書館蔵の「満文老檔」「五体清

もに、また世の中が変わりつつあると思います。まいことに一時代が終わつたという感じです。

私どもは先生のご冥福をお祈りするとともに、後に残された者がこれからどういう風に生きるか、新しい世の中にどう対応するかを考えるべきでしょう。

亡くなられた方ご自身が後に期待することも大きいはずです。神田先生の場合には、ご家族のことなど心残りもあつたでしょう。何にせよ、私どもは期待に答える必要があります。

むかし読んだ古事記に、日本武尊が賊を討つて東奔西走したのちに、伊吹山の神にあつて命を落とすのですが、その亡くなるときに辞世の歌をうたつたといいます。その一首。

命の全けむ人は たたみこも 平群の山の 熊がしが葉を 華^{うず}に挿せ其の子

(堀 敏二)

傷逝——神田信夫先生追悼文集

1900年四月三十日 発行

発行

神田信夫先生追悼文集編集委員会

代表 堀 敏一・松村 潤

〒101-8301 千代田区神田駿河台一一

明治大学文学部アジア史(寺内)研究室^{氣付}

製作 汲 古 院

〒101-8301 千代田区飯田橋二一五一四

傷逝 神田信夫先生追悼文集 目次

I 遺稿 ヘトウアラ城再訪

II 年譜・著作目録

著作目録

弔辭

友人代表

明治大学代表

学界代表

教え子代表

IV 友人

寺戸原松

内川村

威芳道

威太郎

威太郎

威太郎

神田

信夫

神田

信夫

神田

神田

1

16 5

48 46 43 39

思い出ばなし

思い出すことなど

神田信夫君を憶う

V 学界

神田信夫先生、奥様……残念です

神田信夫先生と「今時の学生」

神田信夫先生と「満族史研究会」

神田信夫先生に学んだ日々

神田先生の思い出

神田信夫先生と台湾、そして『旧満洲檔』—追想一題—

フィールドの神田先生

神田先生と第六回満族史研究会大会

広禄先生との邂逅

おなじ小田急線沿線に住んで

神田信夫先生と東洋文庫

大谷大学所蔵神田文庫について

山根幸夫	55	柳田節子	53	荒松雄	51
------	----	------	----	-----	----

河内良弘	70	小沼孝博	67	赤嶺守	61
------	----	------	----	-----	----

楠木賢道

鈴木真道

中村良夫

細谷潤

綿貫良

松浦立

見立

谷茂夫

斯波義郎

大雄潤

波義良

久保田喜行

萩原喜行

五十嵐喜行

久保田喜行

萩原喜行

久保田喜行

大谷大学所蔵神田文庫について

おなじ小田急線沿線に住んで

神田信夫先生と東洋文庫

大谷大学所蔵神田文庫について

VI 明治大学教職員

明治大学教職員

神田信夫先生を偲ぶ

神田信夫先生の自然体

雑感

神田信夫先生を偲んで

神田信夫先生について

155 153 152 149 145

石田	土肥	萩原	久保田	池田	福井	池井	小倉	戸川	西里	喜行
田	肥	原	田	田	井	端	芳	郎	里	行
蕙	五十嵐	文	文	文	雪	雅	彦	108	喜	行
子	子	子	守	次	温	浦	郎	105	喜	行
141	137	133	131	130	125	123	120	114	喜	行

早乙女
小林
達三
三郎
155

木村
野
三
礎
153

岡
大塚
初
誠
149

大
塚
重
145

VII

明治大学卒業生

- 神田先生の思い出
神田先生の面影を偲んで
我が師・神田信夫先生
卒業論文に感謝
- 神田先生の想い出
神田信夫先生のご逝去を悼む
お怒りになった神田先生
神田信夫先生と私
- 神田先生の想い出
神田信夫先生のご逝去を悼む
お怒りになった神田先生
神田先生のご逝去に寄せて
- 神田先生を偲ぶ
神田先生を偲びて
神田信夫先生の思い出
神田先生と日本の古文書——いつも聲をかけて下さった先生——
思い出すこと、考えること、伝えたいこと

- 神田先生のユーモア
神田先生の思い出
神田先生とベゼクリク千仏洞
朝鮮史研究会の大家さん
神田家の漬物
- 神田信夫先生のご逝去を悼んで
神田先生の一言に導かれて
三枚の写真と宿題
神田信夫先生を偲ぶ
- 神田先生ご夫妻・並びに大学院時代の思い出
神田先生との三十年余
大菩薩嶺登山の思い出
なおも怖かった先生の思い出
檔案と葉書
論文は天国までお届けします

文	山	宮	入	戸	内	西	青	沢	依	宮	中	川	関	宮	姜	林	田	山
田	崎		野	山	川	木	松	田	田	村	村	根	田	中	雪	厚	崎	
純	耕	一	幸	久	良	雅	素	松	豊	玲	健	孝	三	節	幸	子	子	
實	一郎	幸	行	生	治	子	松	豊	玲	壽	子	伸太郎	子	相	子	雄	子	
248	243	240	238	234	231	230	226	224	222	220	217	215	212	209	207	206	204	

阿	青	阿	青	阿	部	阿	部	阿	部	島	田	中	田	簡	井	原	道
部	山	山	山	山	正	正	和	部	英	田	福	福	佩	刀	正	和	生
皎	治	皎	玉	玉	和	和	司	雄	雄	寺	堀	堀	敏	規	榮	敏	生
201	196	194	189	186	194	193	189	186	186	高	高	寺	幸	保	次	一	160
										田	田	内	田	規	次	一	167
										永	永	威	幸	刀	和	和	158
										田	田	太	男	佩	刀	正	155
										兒	兒	三	三	刀	正	和	157
										玉	玉	雄	雄	刀	正	和	164
										寺	寺	威	威	刀	正	和	172
										高	高	太	太	刀	正	和	174
										寺	寺	三	三	刀	正	和	167
										永	永	雄	雄	刀	正	和	160
										田	田	三	三	刀	正	和	158
										堀	堀	威	威	刀	正	和	155
										松	松	太	太	刀	正	和	157
										崎	崎	三	三	刀	正	和	155
										賀澤	賀澤	威	威	刀	正	和	155
										氣	氣	太	太	刀	正	和	155

まだあきらめるな

神田先生の思い出

神田信夫先生の遺産

神田信夫先生の思い出

神田先生から届いた手紙—北京留学を振り返つて—

VIII 遺族

父の思い出

孫から見た祖父

愛妻家の祖父

醜金者芳名録

あとがき

傷

逝——神田信夫先生追悼文集

村 横 橫	谷 外 平 仁
松 田 田	小 松 原 家 川 野 科
聰 直 敦	ゆ 章 和 晴 彦
子 文 子	り 子 雅 豊 彦
.....
277	275
272	268
265	259
257	255
252	252

6